

栄養教諭制度の創設についての一考察 —家庭科教育担当の立場から—

A Consideration of the Foundation on Nutrition Teacher's System
- In Charge of Home Economics Education -

吉原 崇 恵
Takae YOSHIHARA

（平成15年10月1日受理）

はじめに

学校で健康教育として栄養指導をする動きがある、と耳にしたのは7年も前になるだろうか。

その瞬間、栄養指導は健康教育であるだけではなく生活の仕方の問題として家庭科が受け持ってきたのではないか、との疑問を抱いたことをずっと忘れてはいなかった。

今から振り返れば、それは保健体育審議会の平成9（1997）年9月答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について」において、新たな免許制度の導入を含めた学校栄養職員の資質向上策の検討の必要性が指摘されていた頃のことである。

その後、中央省庁等の改革の一環として保健体育審議会を含め6つの審議会を整理統合して中央教育審議会が平成13年1月6日付で設置された。

平成14（2002）年の答申では栄養教諭（仮称）制度など学校栄養職員に関わる新たな制度の創設を検討し、学校栄養職員が栄養及び教育の専門家として児童生徒の食に関する教育指導を担うことができるよう食に関する指導体制の整備を行うことが必要であると提言されていた。

そして、平成15（2003）年9月中央教育審議会（以下中教審）の中間報告として「食に関する指導体制の整備について」が出された。

この間、日本家庭科教育学会、日本家政学会は平成13（2001）年6月要望書を提出した。そこには初等・中等教育における食に関する教育のありかたについての家庭科教育、家政学研究所の蓄積からの見識が出されている。

また、平成14（2002）年3月には文部科学省スポーツ・青少年局所管で食生活学習教材「食生活を考えよう」（小学生用）（中学生用）および各指導者用冊子が静岡県においても県教育委員会を通じて配布された。

本論は家庭科教育の立場からこれらの情勢をどのように考え、今後の食教育に対していくのかを考察するものである。

そのために今回の中教審中間報告について論点を整理すること、次に冊子「食生活を考えよう」（以下食生活学習教材）が家庭科教育と住み分けがあるものなのかどうかの検討をすること、これらをおして、食に関する指導における家庭科の独自性と役割を整理することを目的とするものである。

1 中央教育審議会「食に関する指導体制の整備について」(中間報告)の検討

(1) はじめに栄養教諭ありきの疑問

報告の冒頭では、栄養教諭制度を創設しその専門性を遺憾なく発揮させる環境整備が必要だとして、その背景説明がされている。食習慣の形成が国民的課題になっており、とくに成長期の児童生徒にあって重要である中で、家庭に責任の全てを担わせることは現実的ではなく、学校からの働きかけと家庭・地域・学校の連携が必要だとしている。そのために現在の学校栄養職員の専門性だけではなく、自ら責任を持って指導にあたっていけるように教育に関して必要な資質を身につけた者が食に関する指導を担えるよう栄養教諭制度を創設するとある。

以上は第1章の要約になるが学校における食の指導の現状の分析が充分にはなされておらず、それらの現状を改善するための方向は出されずに、栄養職員の活用でもなく新たに創設する栄養教諭に責任を持たせようという方針が強く出されていることがわかる。

(2) 栄養教諭の職務の優先順位の問題性

第2章、栄養教諭の創設としての栄養教諭の職務の設定が重要である。報告では栄養教諭は教育に関する資質と栄養に関する専門性を併せ持つ職員として、学校給食を生きた教材として活用した指導を行うために大きく3つの職務を提示されている。その筆頭は食に関する指導、続いて学校給食の管理、最後に食に関する指導と学校給食の管理の一体的な展開である。筆頭が学校給食の管理ではなく食に関する指導である点に注目していきたい。

筆頭に上げられた食に関する指導の内容は①児童生徒への個別的な相談指導②児童生徒への教科・特別活動等における教育指導③食に関する教育指導の連携・調整であるとされている。

①の個別的な相談指導とは食に関するカウンセラーとしての役割を意味しており特徴的であると考えられる。しかしながら「学級担任や家庭だけでは対応が困難」で「栄養学などの専門知識に基づいた対応が必要」なため「栄養教諭が中心になって取り組んでいく必要がある」と、とらえるのは一面的であると思われる。児童生徒の食生活の問題は彼らを取り巻く家族や精神的な問題を現わしている場合もあり、栄養教諭が中心でなければならぬと言い切ると恣意的なものになり、問題の解決に誠実に取り組んでいる関係者に対して不遜なものになっている。次に②の教育指導についての構想を見ていきたい。

学級担任の年間指導計画において栄養教諭が食に関する指導の一部を単独で積極的に担っていくことが大切と考えられている。この場合は給食の準備、後片付け、マナーなどを学ぶ場として中核的な役割を担っていくとある。続いて家庭科や保健体育科をはじめとして食に関する領域や内容について学級担任や教科担任と連携しつつ、栄養教諭が専門性を生かした指導を行うことも重要であるという。これらは学校教育活動全体の中で行われるものであり、食に関する指導に関わる全体的な計画を策定するに当たって、栄養教諭が中心的な役割を果たし連携、調整の要としての役割を期待している。そこには学級活動や教科の体系や独自の役割があることは忘れられているかのようである。食に関する指導と言っても学級活動や各教科の中での位置づけがあることはふまえなければならない。

(3) 考察

① 食に関する学習指導の現状との関連について

平成10(1998)年までの旧学習指導要領を見ても食生活や栄養指導に関連する内容を擁している教科は次のとおりである。

小学校では社会の第3学年、第4学年、第5学年で地域の生産、地域の人々の活動、産業と国民生活の関連を扱う項目があり食料生産では地域の食材に触れる機会になっている。体育第5学年及び第6学年において保健の分野では「健康な生活について理解できるようにする」との項目があった。

家庭の第5, 6学年を通した目標の一つは「簡単な調理が出来るようにするとともに、日常食の栄養的とり方や会食の意義を理解し、食事をくふうしてととのえることができるようにする」であった。この期の家庭科の食に関する内容は「つくる」「たべる」「営み、伝える」という食生活行動の三側面¹⁾を備えていたのである。

しかし、教育内容の「厳選」と時間数削減がなされた平成10(1998)年版の学習指導要領で家庭科の食に関する内容は次のようになった。「日常の食事に関心をもって、調和のよい食事のとり方がわかるようにする。食品の栄養的な特徴を知り、食品を組み合わせるとる必要があることがわかること、1食分の食事を考えること」「日常よく使用される食品を用いて簡単な調理が出来るようにする」などである。この際、栄養素の学習内容は中学校で扱うことになり、調理についても弾力性が増す一方、題材指定は「米飯とみそ汁」に限られたものになった。

中学校家庭の食に関する目標では旧学習指導要領では「日常食の調理を通して、栄養及び食品の性質と選択について理解させ、青少年にふさわしい食事を計画的に整える能力を養う」であり、教育内容は青少年の栄養、日常食の献立、食品の性質と選択、調理などの分野で構成されていた。

平成10(1998)年版の学習指導要領では中学生の発達課題である自立と学びを結合させ「生活の自立と衣食住」という体系が準備された。その中で「中学生の栄養と食事」を中心に生活の中で食事の果たす役割、健康と食事とのかかわり、栄養素の種類と働き、中学生に必要な栄養を満たす献立、食品の選択と日常食の調理の基礎、課題と調理の応用として日常食や地域の食材を生かした調理の工夫、会食の計画実践などの内容で構成されている。食事を健康の課題からとらえる事はもとより、栄養・食品・献立・調理・地域の食文化を自らの課題の解決をとおして学習できる点が家庭科の得意とする点であり実績のある点でもある。

② 栄養教諭の職務について

平成14(2002)年当研究室朝比奈玲子の調査を下に考察したい。調査は小学校6年生を対象に静岡県下で行ったものであった²⁾。

そこで先ず学校給食と家庭での食事の特徴の違いを問うたところ学校給食では「みんなで食べることの楽しさ」があげられた。また、食事を作っている人を知っているかどうかによって作る人の気持ちを受け止めて食べることが出来るかどうかに関係していた。すなわち食事の「つくる」「食べる」「営み、伝える」の3側面は相互に関係していることに基づく学習指導が必要であることを示していた。学校給食の場を食の指導に活用する場合に、食べる者と作っている人の交流などは現に存在する栄養職員の残されている使命である。それらをふまえれば、栄養教諭の職務の優先順位の筆頭は学校給食の管理とそれを利用した指導といえるものである。教科や学級指導には独自の役割や体系、論理があるわけであり食の指導が独立的に存在するものではないという点の認識が必要である。

その上にとって食に関する指導のある部分を学級担任や家庭科などの教科担任と連携して指導することは期待される事である。教育行政としては、だからこそ逆に家庭科の充実を図り栄養教諭の活用が出来るよう家庭科専科担当者の配置や研修機会を同時に考えるべきであろう。

③ まとめ

平成15（2003）年3月31日の中央教育審議会スポーツ・青少年分科会（第19回）議事録をみると次のような意見のやり取りが見られた。

委員：食に関する指導の充実について、第二次報告が出ているが、小学校、中学校、高等学校の家庭科、技術・家庭、また、家庭一般を含んだ高等学校での指導の充実をさらに図る必要がある。栄養や健康については、これらの教科の中でも重視しながら行ってきた（後略）。

文科省：先ず、家庭科、保健体育等については、これらの中でも食に関するものは重視されていることは十分承知している。報告では、栄養の専門家を学校教育の中でどう活用していくかという観点から書かれており、相乗効果を発揮しながら、より高いレベルの指導を目指すという観点から書かれたものである。

このやり取りを見ると、栄養教諭を活用すれば従来の家庭科などにおける食に関する指導の、どの点が、どういう意味でより高いレベルの指導になるのか全く具体的には説明されていない。

家庭科教育の目標、内容、方法の研究成果は例えば『家庭科の21世紀プラン』³⁾に現時点での一応の集約がなされている。そこでは「個人および家族の発達と生活の営みを総合的に捉える」「日々の生活活動の中で、主体的に判断して実践できる能力を育てる」「明日の生活環境・文化を創ることの出来る資質・能力を育成する」ことを能力目標に掲げ、内容構成の要素として縦軸としての「生活資源」である食物・被服・住居について、横軸の「健康、人間、環境」の視点から知識・技術を獲得する位置づけになっている。このような縦軸、横軸からなる体系の中に、食に関する指導があるのである。このような研究成果の上に立てば、家庭科の食に関する内容だけを、栄養教諭が中核になって計画し実施することには無理があるのではないだろうか。

また、平成13（2001）年日本家庭科教育学会、日本家政学会が当時の文部科学大臣及び関係部署に対して、食に関する指導の充実にあたって家庭科教育の充実策を検討するよう要望書を提出し、家庭科や家政教育、家政学研究は、生活を総合的に捉え創造することを使命としてきた趣旨を次のように述べていた。

家政学は「人間の生活を、人と人、人と物、人と環境のかかわりとして成り立つことの認識に立ち、生活を総合的・複合的」に検証することを目的にしていること、食教育は、単に食事や栄養の問題としてではなく、生活全体のあり方の問題と関わらせて実施されるべきと考えること、が主張された⁴⁾。

家庭科教育学会は「家庭科では、従来から児童・生徒の心理や発達を踏まえた上で、生活者の視点から総合的に食生活についての指導を行ってきた。つくる、食べる、供するという一連の行動過程を通して実践的・体験的に学ばせることにより、食事と家族、食事と環境とのかかわりを考えさせ、主体的に食生活を創造する力を育成してきている」と主張された⁵⁾。

以上の研究成果に学んで、家庭科教育担当の立場では次の点を問題にしたい。①教科教育には独自の役割や教育課程の体系をもっていると考え、②家庭科や家政学には食教育を生活のあり方として認識し、それを創造する主体を育てよう意図してきたこと、の二点である。すなわち、家庭科が教科教育であることから、たとえ食に関する部分とはいえ栄養教諭が単独に責任を持って指導することは出来ず、あくまで家庭科教師との連携のもとでなくてはならないと考える。

以上、中教審で食に関する指導体制の整備を問題にする時、従来それらを扱ってきた教科内容や成

果の検討こそ必要であり、はじめに栄養教諭ありきではなく、職務としての独自性は学校給食の管理と活用こそ優先順位であることを明確にすべきであろう。そして食に関する学習指導の実態や従来の実績の丹念な分析、また家庭科専科教諭の配置や研修機会の充実などの検討を無視することは、論理矛盾であることを家庭科関係者は明確に認識しておきたい。

2 「食生活学習教材」と家庭科教科書の検討

(1) 食生活学習教材の題材例

この教材は小・中学生用とそれぞれの指導者用の冊子からなっており4分冊といえるものである。小・中学生用はワークシートと資料や解説から構成されているテキストと学習帳を合わせたものである。指導者用冊子の解説では学級活動、給食、総合的な学習時間のほか教科書のある教科の副教材としての活用をすすめている。

課題は3つあげられている。「望ましい食習慣を身につけよう」「食の自己管理能力を身につけよう」「日本の食文化を知り大切にしていこう」であり小・中学校とも同様である。

一つ明らかな間違いがあるので指摘しなければならない。それは小・中学生指導者用冊子でいずれも「食生活の文化は家庭科では取り扱わないことになっており留意する必要がある」という点である。中学校では前述したように学習指導要領で地域の食材は教育内容になっていること、小学校ではごはんや味噌汁の調理題材が唯一指定されたがその理由は日本の食文化の象徴だからである。すなわち日本の気候風土や歴史的な人々の知恵から主食と、組み合わせとしての大豆食品のよさを学ぶ価値があるからであり、日本の食文化を学び担っていくための題材である。家庭科では「食生活の文化は学ばない」との文言は明らかな間違いであり修正されなければならない。

以下、食生活学習教材の題材である。

<p>望ましい食習慣を身につけようのための題材</p> <p>①小学生用の題材</p> <ul style="list-style-type: none"> 一日のスタートは朝ごはんから<あなたは、朝ごはんを食べていますか/朝ごはんはなぜ大切か/朝ごはんはどのようにとればいいのか/休日に、自分で朝ごはんを作ってみよう> <p>②中学生用の題材</p> <ul style="list-style-type: none"> 中学生の体と生活<中学生期の発育の特徴を知りましょう/生活習慣病と食習慣について考えてみましょう>
<p>食の自己管理能力を身につけようのための題材</p> <p>①小学生用の題材</p> <ul style="list-style-type: none"> どんな食べ方がいいのかな<バイキング給食にチャレンジしましょう/1食分の食事について考えましょう/主食・主菜・副菜がそろっていますか/おやつ(間食)をとりすぎていませんか/おやつ(間食)をとるならどうしますか> <p>②中学生用の題材</p> <ul style="list-style-type: none"> バランスのとれた食事<毎日の食生活をふりかえってみましょう>、朝食の大切さ<朝食をとりましょう>、間食と夜食のとり方<間食・夜食について考えてみましょう>、ファーストフード店・コンビニエンスストア<ファーストフード店やコンビニ>

エンスストアを賢く利用しましょう>、成長期にある私たちのダイエット<ダイエットについて考えてみましょう>、スポーツと栄養<スポーツのための効果的な食事>

日本の食文化を知り大切にしていこうのための題材

①小学生用の題材

- ・ 地域に伝わる料理を大切にしよう<地域の産物と郷土料理を調べてみましょう/みんなで行事食を楽しみましょう/昔から食べてきた食品を大切にしましょう>

②中学生用の題材

- ・ 食生活の変化<昔の食事と今の食事を比べてみましょう>、日本の郷土料理<日本の食生活のよさを知りましょう>、日本の食文化の多様性<外国の食文化とのかかわりについて考えてみましょう>

以上、食生活学習教材の題材と内容を見ると、食品のバランスのとり方や食文化の取り上げ方についても家庭科教育との重複があることが予想される。しかし中学生用にあるような生活課題を取り上げている点は積極的に評価できると思われる。

(2) 家庭科教科書の題材例と内容構成の特徴

家庭科の教科書は大、中、小の学習内容の単位で構成されており、食に関する部分だけ取りだすことには教育意図の真意を反映しにくい側面がある。その限界を踏まえた上であえて検討するには題材構成を挙げるのが適当だと考えた。

① 小学校家庭科教科書の食に関する小題材< >内

T社の場合 大きい学習のまとまりが2つあり、わたしたちの生活を見つめよう、よりよい生活を目ざそうとされている。それらの中を構成する中、小の題材を列記する。

- ・ 見つめようわたしの食生活<わたしの食事を調べてみよう/なぜ食べるのだろう/どんなものを食べているのだろう/調理をしよう>
- ・ 見直そう食品のとり方<食品をグループに分けてみよう/食べたもののバランスを考えよう/フライパンを使って調理をしよう>
- ・ 家族が喜ぶおかず<どんなおかずがあるだろう/どんなおかずを作ろうかな/身近な食品でおかずを作ろう/食品を組み合わせでおかずを作ろう/食品の選び方や買い方を考えよう>
- ・ まかせてねきょうの食事<食べ物の組み合わせを考えよう/ごはんのみそしるを作ろう/バランスのよい食事を考えよう/楽しい食事をくふうしよう>
- ・ 伝えようわたしの気持ち<何ができるようになっただろうか/自分の気持ちを伝えよう>

以上のように小学校家庭科教科書は、生活を見直すことから始めて、生活の成立ちを「わかる」「できる」「考える」「工夫する」ことをめざして生活を多面的に、問題解決的に、ゆえに総合的に展開しており、食に関する内容の価値は、食品の栄養的バランス、文化の伝承、自己実現、生活管理としての調理など多面的、総合的で豊かな内容がある。

② 中学校家庭科教科書の食に関する小題材〈 〉内

学習指導要領を反映して、食に関する題材と内容は「生活の自立」という内容のまとまりの中に位置づけられている。先ず口絵にはT社では「日常の食品について考え」さらに「食品の輸入と自給率」を取り上げている。また、「地域の食材を生かした調理をしよう」がある。K社では「健康は食生活から」そして「太陽と大地の恵み…いただきます」がある。なぜ食べるかどのように食べるかを提示し、自分たちの食べている食品が四季や地域をへて整えられることに気づくよう誘っている。これらをもつても家庭科が食文化を扱わないとした「食生活学習教材」の文言は誤りである。以下、K社の題材である。

- ・ 健康的に食べる：これからのわたしたちと食生活〈毎日の食事について考えてみよう／食習慣と食事の役割について考えよう〉栄養と健康〈栄養と栄養素について知ろう／いろいろな食品の栄養素を調べよう／食品を組み合わせよう〉食材にこだわる〈生鮮食品（以下略）、表示と加工食品、環境に配慮してつくる、魚の調理、野菜の調理、肉の調理〉食生活を自分の手で〈食事の計画を立てよう／食生活を見直そう〉
- ・ 選択題材 楽しく豊かに食べる：日常食をよりよくしよう〈わたしたちの食生活の課題、地域の食材を使った調理〉会食を楽しもう〈会食を計画しよう／会食のための献立を考えよう／行事の食事を知ろう〉

以上のように中学校家庭科教科書は、食事の見直し、栄養、食品の組み合わせ、食材と調理、食生活の課題、地域の食材や行事食等の文化という内容要素で構成されている。こうしてみると先の「食生活学習教材」は、家庭科教育の食に関する内容と住み分けはなく重複しているといわざるを得ない。

(3) 新たな検討

栄養学の専門家が展開する内容で期待したい部分がある。それは食品に含まれる栄養素が体内で働くプロセスを取り上げる栄養生理学の生かし方である。

そのために「食生活学習教材」と「家庭科教科書」の中で栄養生理に相当する部分を取り上げ記述の仕方を比較してみよう。いずれも小学校の場合である。

① 食生活学習教材の場合

朝ごはんはなぜ大切なのでしょうか／「早く起きなさい」こんな声で起きる人はいませんか。朝ごはんをしっかり食べることは1日を気持ちよくスタートできるとともに、勉強や運動に自分の力を思い切り発揮することにつながります。朝ごはんについて話し合ってみましょう。／朝ごはんをしっかり食べると…頭がすっきりとさえます。朝のうちに排便ができ、気持ちよく登校できます。眠っている間に下がった体温がもどり、元気に働けます。

以上の記述には、朝食の効果は述べられているが、なぜそうなるのかのプロセスの説明はなされていない。指導者用の説明にも朝のリズムや体温上昇の役割のほか「エネルギー源は肝臓にたくわえられたブドウ糖であり、肝臓には12時間分しかたくわえがない」「不足すると、いらいらしたり、集中力

がなくなる」とされているだけである。

② 家庭科教科書の場合 K社の場合

なぜ食べるのだろう／わたしたちは、食べ物を食べることによって、成長したり、元気に活動したり、運動したりすることができます。わたしたちが食べている食品には、いろいろな栄養素が含まれています。これらは、体の中で消化・吸収され、体の調子を整えたりするなど、それぞれちがったはたらきをしています（後略）。朝食を作ってみよう／朝食は、わたしたちが午前中に活動するのに必要なエネルギーを得るための大切な食事です。朝、協力して食事の用意などをすると、家族とのふれあいの時間がもてるだけでなく、体や手を動かすことによって食よくまし、おいしく食べることができます。

ここでも同じく栄養生理のプロセスは説明されていない。しかし、家庭科の内容構成の特徴は食べるものの意味を栄養面だけではなく人と気持ちのふれあい、伝え合い、体を動かすことの意味として価値づける点に特徴がある。実用的でありながら実用にとどまらず、自らの生き方、生活の仕方にリンクさせて学ぶ点に家庭科の特徴がある。だからこそ、一方では栄養教諭の指導の特徴を栄養生理に見出したい。その内容は、専門分化的な内容が必要になり、児童が理解すべき内容、そのための方法など検討すべき課題がある。しかし、なぜ食べるかについての学習指導方法として、指導者用冊子では、ロールプレイングやブレインストーミング、ケーススタディがあげられている。これらの方法は一般的で栄養学の専門家でなくとも出来ることである。テレビの科学番組などではこのような分野でもわかりやすい模型や実験を行って見せている。

「食生活学習教材」及び「家庭科教科書」では十分展開されていない栄養生理の内容について、目で見える、手で触る、問題解決的に展開する方法の研究が開発されるべきである。栄養教諭の創設ではその部分の貢献は期待したい点である。

まとめにかえて

栄養教諭創設について、先ず栄養教諭ありきではなく、家庭科など従来、食教育を担ってきた実績を分析しそれを充実させる方法を同時に追及すべきこと、栄養教諭の職務の優先順位として、学級活動や家庭科などの教科指導ではなく、給食管理や個別指導にこそあること。そして食生活学習教材と家庭科教科書の食に関する内容の検討では、ほとんどの内容は重複がある中で、とくに栄養生理に相当する学習内容は両者とも不十分であり、その部分こそ栄養教諭の働きが期待される点であることがわかった。

栄養教諭が家庭科教育の論理を損なうことなく、食に関する教育の補強としての役割を果たしていくことができるためには、家庭科教育担当者の自負と力量形成が必要であり、その研修機会をも要求していかなくてはならない。家庭科は教科教育として児童生徒が自らの生き方とリンクさせて学ぶものである。児童生徒が性別役割分業やジェンダー意識の中にいる学びを見直すことは生活についての学習にとっては必要なことである。家庭科はそのような子どもの学び方をふまえて、自立と共生の学びの道筋を貫いていきたい。

注及び引用文献

- 1) 足立巳幸「子どもたちの食生態」『食生活の現代的課題』豊川裕之編著 放送大学教育振興会 1997 P.107
- 2) 朝比奈玲子 児童期の食行動形成における家庭、学校給食、家庭科の役割と連携 平成14年度静岡大学教育学研究科修士論文
- 3) 日本家庭科教育学会『家庭科の21世紀プラン』1997 P.116-117
- 4) (社)日本家政学会 会長 酒井豊子による要望書 平成13年6月
- 5) 日本家庭科教育学会 会長 中間美砂子による要望書 平成13年6月19日

文中の家庭科教科書について

T社は東京書籍 小学校は平成15年2月版 中学校は平成14年2月版

K社は開隆堂 小学校は平成14年2月版 中学校は平成14年2月版である。